

ゆめいろの森の中で～2012 年改稿版

xatosi

1. [本文](#)

ゆめいろの森の中で

——むかしむかし、あるところにちょっと人のいい男がおりました。

男は、人柄は良かったのですが、時々川や森を見ながらぶつぶつとよくわからないことを呟いたりするので、村人達からは変わり者扱いされておりました。

男の方も、自分は少し他人と違うなと思っておりました。仲間の中でやることに、うまく合わせられないこともありました。そんなとき、男はひどく寂しくなり、一人森の中に入って、木々に囲まれながら長い時間座り込んで、物思いに沈んでいました。そのうち男は、特に理由が無くても森に入ってゆき、一人で過ごしていることが多くなりました。

ある日男は、森の中で一人の女に会いました。女は森の中で木漏れ日を浴び、わらいながら誰かと話をしているようでした。しかし、誰と話しているのか、男にはわかりませんでした。女の周りには、人の姿は誰一人見えなかったからです。

女はすぐ、男の存在に気づきました。そして男にほほえみかけながら、語りかけました。

「こっちへいらっしゃい。来て、一緒にお話ししましょう」

まるで心の底から呼びかけてくるかのようなその声に、男は誘われるまま女の元に歩いてゆきました。男が女のそばに座ると、女は両手をひろげて、周り中に話しかけるように言いました。

「さあみんな、新しいお友達よ」

すると、男の心の底から、女のものとは違う、いろいろな声が聞こえてくるようになりました。それは、ふたりの周りにはいる、たくさんの木々や、鳥や小動物達が、男に語りかけてくる声でした。

男はとてもおどろきました。でも、今まで聞いたこともない木や鳥の声を聞くのが楽しくて、ずっとそれを聞き続けていました。また、男が話しかけると、その声もまた、ふしぎなことに木や鳥たちに伝わっていくのでありました。

男は、毎日森に出かけてゆくようになりました。森に住むもの達と話すことは、村にいるよりもずっと楽しいことだと思ったのです。森には女がいて、そして男は森に住むものと話すことが出来ました。でも、女がいないこともありました。女がいないと、男には木や鳥の声は聞こえては来ませんでした。そんなとき男は、森の中で女の名を呼びました。するといつの間にか女がそばにいて、また森の声が聞こえてくるようになるのでした。

でも、そんな日も長くは続きませんでした。男が毎日森に出かけてゆくのを、村の人たちがあやしむようになったのです。そして、男のあとをつけて森の中に入っていった村人の一人が、森の中で女と二人でいる男の姿を見てしまいました。

その村人には、森の声は聞こえませんでした。話を聞いた村人達は、男がその女と恋仲になったのだと思いこんでしまいました。そして男に、そんなに好き合っているなら、わざわざ森の中

で会ったりせずに、村に連れてきて夫婦になればよいといたしました。

男はこまっしてしまいました。女と夫婦になることは、決して悪くないと思いました。でも男は、前に聞かされていきました。森をはなれ、人々の中に溶け込んでしまえば、森の声はもう二度と聞こえなくなってしまう。男にも、声を伝えてきた女にも。

男は、答えを出せないまま、また森にゆきました。森にいた女は、すぐに男の抱えている悩みを見抜きました。そして男にこういきました。

「行きましょう。私は、あなたと共に参ります」

それでいいのか、もう森の声は聞こえなくなってしまうんだぞ、そう問いかける男に、女はいいました。声は聞こえなくても、私たちが言葉ではなしかけなくても、森はきっと育ってゆく。私たちも、森を守ってゆくことはできる。それに、と女はいいました。またいつかきっと、私のように、森に入って行って、生き物たちの声を聞き、伝えることの出来るのものが生まれてくるでしょうと。

女は、男と共に森をでました。村の中に入り、夫婦となった二人には、森の声はもう聞こえなくなりました。それでも二人は、自分たちのもうけた子に自分たちが聞いた森の声を、物語って聞かせ、伝えてゆきました。そして、昔聞いたその声を思い出しながら、一生森を守ってゆきました。

1.

「7, 8, 9, 10」

まるで遠くから聞こえるように、回転周期をカウントする声が聞こえる。僕はその声を、当たり前のように聞き流していた。

「ちょっと、今の記録したの！」

「え？」

慌てて我に返ると、すぐさま自分が何をしているのかが思い出された。目の前で、大きな金属板がゆっくりと回っていた。

「もう...講義ならともかく、実験の授業中にぼんやりしないでよね。最初からやり直しじゃない...」

半立ちになって僕につかみかかろうとしていた古瀬智羽ふるせ ちうは、諦めたように大きく息を吐き、そのままどっしりと深く椅子に座り直した。

「ごめん...」

僕は、とりあえず謝るしかなかった。重りのような金属板は、まだその感性を失わず回り続けていた。そして僕の肩に、軽く重みが感じられた。

「睡眠不足かな、響助君？」

振り返って、肩に腕を乗せた犯人の顔を見極める。前髪が撥ねて眼鏡をかけた、こんだようへい紺田洋平の顔

がそこにあった。

「いや、睡眠不足というほどのことはないと思うんだけど...たぶん」

「では風邪か二日酔いかね？ それなら薬があるが」

「いや、残念ながらどちらでもない。それ以外の病気でもない。だから薬は必要ない。あり得ない」

紺田に薬を押しつけられるのではないかと危惧した僕は、言葉を並べ立ててあらゆる薬の必要がないことを主張した。彼は、何の考えがあつてのことか知らないが、常時いろんな薬を持ち歩いている。しかも彼は、何かにつけて僕のことをかまおうとする。迂闊な応答をすれば、つけ込まれて訳のわからない薬を何種類も押しつけられかねない。

「本当に必要ないんだ。お引き取り願おう」

「そうか？ じゃあせめて、このビタミンEの錠剤だけでも...」

「いやいらないうって。マジで。あ、ビタミンの必要性についての講義なら前に聞いたからそれも必要ない」

「あ、じゃあそれ、あたしが欲しい！」

古瀬が話に割り込んできた。跳ね起きるように椅子から立ち上がり、台座に手を置いていた。その衝撃で回り続けていた金属板が揺れ、回転に加えて振り子運動を始めた。

「何だ君は。またそうやって、^{きょうすけ}響助君の薬を横取りするつもりかい？」

「いいじゃない、響助君いらないうって言ってるんだから」

「彼の要る要らないの意志はこの際関係ない。この俺が彼にとって必要と判断した、それが大切なのだ」

無茶苦茶な理屈だ。僕の意志はどうでもいいって？

「あたしにとっても必要だと判断してよ」

「悪いが、とてもそうは思えない。君は見るからに健康そのものではないか。体も、アタマも」
それは無いと僕は心の中でつつこみを入れた。

「経済的には不健康だもん」

そう言って古瀬は、椅子の上でふんぞり返った。決して自慢することではないと思った。

「ああ、わかったわかった。じゃあこのビタミンE錠剤は君にやる。口を開けろ」

「ちょっと待った。口を開けろって、この場で口の中に放り込む気？」

「当然だ。この俺の指はじきの腕前、とくと見るが良い」

そうやって紺田は、大仰な構えをして見せて、古瀬の口に狙いを定めた。周り中の注目を浴び続ける二人、その間に挟まれた格好の僕は、ちょっと鬱だった。

「あーっ、しまったっ！」

「ふふふ、ビタミンE、確かに受け取ったり！」

顔の前で右手を握りしめ、勝ち誇った表情で立っている古瀬の姿があつた。飛んできたビタミンE錠剤を、口の中に入る直前につかみ取ったようだ。紺田は、頭を抱えて座り込んでいた。だが、その表情はちっとも残念さうでも何でもなく、むしろ笑っているようでもあつた。

僕は、ひたすら苦笑していた。いつもと同じ、慣れた光景。それでも僕は、ただ傍観するだけで、中に割って入ることは出来ないでいた。

そんな僕の肩に、また少しだけ重みがかかった。いつの間にか立ち上がっていた紺田が、僕の肩に手を掛けていた。

「真面目な話、ちょっと体調悪そうぞ。大丈夫か？」

耳元で、囁くようにそう語りかけてきた。僕は、油断させて息を吹きかけてくるつもりではないかと、気が気ではなかった。

「いや、大丈夫だと思う、たぶん...」

「そうか。まあ、無理はするなよ。それと、夜遊びも控えた方がいいと思うぞ」

「夜遊び？」

ビタミンE錠剤を小袋に詰めてしまい込んでいた古瀬が、素早く顔を上げて反応した。

「いや、夜遊びなんかしてないぞ。おい紺田、妙な事言うなよ」

僕は慌てて紺田を詰問しようと、振り返った。だがそこには、既に彼の姿はなかった。紺田は自分の持ち場に戻って、相方と自分の実験を再開していた。

「ねえ、夜遊びって、何？」

台座に肘を乗せ、頬杖を付いた格好で、古瀬が訊いてきた。金属板は振れが止まり、再びただ回るだけになっていた。

「いやだから、夜遊びなんかしてないってば」

「本当に？」

「本当だ。紺田の言うことなんか、そんな簡単に信じるなよ」

「紺田君は確かに変なやつだけど、嘘つきじゃないからねえ。それに、響助君の保護者だし」

「なんだその保護者というのは」

「紺田洋平によると、彼は環境省指定第一種 いづかきようすけ 井塚響助 取扱主任者だそうである」

「またわけのわからない資格こさえやがって...」

僕は少しうんざりしながら、金属板に手をかけた。回転が弱まりかけていた。

「でも、響助君のこといろいろ気にかけてくれるのは事実だよ？」

「気にかけているというより...ただまわりついているだけのような気もするんだけど」

「まあ、それは受け取り方次第かもしれないけどね」

古瀬は、ノートの上に大きく×テンを描いた。さっきまで取っていた記録は、これで無効になった。

「でも、夜遊びは控えた方がいいんじゃない？」

「だから、それはやつの作り話で」

そう言いながらも僕は、心の中で不安を感じていた。もしかして紺田に、僕が毎夜行く場所、そしてそこで会っている人について、知られてしまっているのではないだろうか。

僕の記憶の中から、前夜のことが思い起こされる。

「こんばんは」

ドームの中で寝そべって星を見ていると、不意に視界が遮られた。肩から、髪の一部が垂れている。影になってはっきりは見えなかったが、それは野口毬音のぐちまりねだとすぐにわかった。

「...星、見えないんですけど」

「ええ。今日は、ちょっと意地悪してってます」

そう言われてすぐに思い当たった。ああもしかして、昨日の事かと。昨日は来なかったから。明確に言葉で約束したわけではないが、それでも僕がここに来るのは当たり前になっていたし、僕も彼女がここに来るのが当たり前のように感じていた。だから、唐突に来なければ不審に思うし、不機嫌にもなるかもしれない。

起きあがる。かすかな光を頼りに、彼女の顔を見る。笑顔だった。そして同時に、怒ってはいないという安心感が広がった。根拠はない。ただ、心の中にそれが、注ぎ込まれるように浸透していった。

「ごめん。昨日は実験で遅くなっちゃってさ」

「うん、たぶん来れないんじゃないかって思って。だから実を言うと、私も昨日は早めに帰ったの」

「ああ、そうなんだ。ならよかった」

彼女はスカートの後ろを少しだけ手で押さえ、そのまま膝を折って僕の隣に座り込んだ。それほど広くないドームの床。その中心に、二人で座る。見上げると、星一つ。二人でその一点を見つめる。

「星一つだけ見えるってのは、やっぱりちょっと寂しいものがあるわね」

「でも、それが味わいがあるとは思わないか？」

「味わいねえ」

「粹と言ってもいい」

「それはさすがに違うと思うけど...」

薄く漏れてくる光の中で、毬音は苦笑した。

「あの星が、よほどお気に入りのようね」

「ま、そうかもな」

「理由なんか聞かせてくれると、ちょっと嬉しいかな」

「理由...ねえ。大したことじゃないよ」

「小学校の時にさ、星の観察ってやるだろ。でも僕の住んでた町って、都市郊外の住宅街でね、星なんか全然見えなかったんだ。で、あちこち見えそうな場所探し回って、やっと見つけたのが

、あれ」

「ふうん。それで」

「そんだけ」

「...なんだ。素敵な恋のお話でも聞けるかと思ったのに」

「残念でした」

「せめて、『実はああいう趣味なんだよ』とでも言ってくれば面白かったのにな」

「星が趣味って事？」

「ううん。うん、いいの。わからないならいい」

「...ごめん。もっとちゃんと勉強しとくよ」

「いいのよ、わざわざ勉強するほどのことじゃないし。それに」

そこで彼女は一呼吸置いた。

「知らない方が幸せってこともあるしね」

知らない方が幸せ。その言葉を口にしたとき、何故か彼女の顔がひどく寂しいものになった。そう思えたのは、気のせいだろうか。

「ねえ」

「なに？」

「星、見てるだけ？ 語りかけたりもするの？」

「さあ。独り言くらいは言ってるかもな」

と言うより、星は言葉を返してくる事など無いのだから、語りかけているつもりでもそれは結局独り言ではないのか。そう思った時、彼女がそっと漏らした。

「そうね。星は生き物ではないから」

「ああ、その通りだ」

そして天井の星を見上げた。二人はしばらく黙っていた。澄んだ空はゆっくりと、しかし明敏に時の経過を感じさせてくれた。そこにある全てには何らの違和感もなく、見える景色も、語る言葉も、自分が今ここにいるという事実も、全てが当たり前であるかのような、そんな感覚を抱いていた。

そして波が峠を越す。

「んっ...？」

その全てが当たり前ではない、それに僕が気づいた時。ドームを縁取る木の向こう、茂みの中から物音がした。

「蛇か!？」

背筋に悪寒が走った。人の手がすぐ近くまで伸びているとはいえ、ここは森の中。小動物達の優先順位が高い場所だ。蛇が接近してくれば噛まれる可能性は十分にある。それがマムシやヤマカガシであれば、最悪死ぬ。戦って勝てば無論命は助かるし、それどころか地元紙の第2社会面に写真入りで載る事が出来るかもしれない。ああ、ちょっとした英雄だ。僕の脳が高速妄想演算

を始めた。悔しがらる古瀬。全校注目の的。集まる期待に、僕本来の力が発揮される。優秀さと、意外な経歴。強みは成功体験。そしてそこには、ずっとともに歩んできた人がいて。10年後、僕は。

そこで時の経過は止まる。勝てる保証など、どこにもない事に気づく。おかしい蛮勇は不要。早々に立ち去った方がよいか。そう思い、半立ちになって、隣に座る野口毬音に目配せをした。彼女は動かなかった。

「えと。なんかいるみたいなんだけど」

それに対し彼女は言葉で返答はせず、ただ目線と表情とで僕に意志を伝えてきた。わかってる、大丈夫、なにも心配はいらない。そう言っている気がした。そして目線は、音のした方に戻る。僕の目線も、同じ方向に移る。何も見えない。何も聞こえない。時が硬直し、不安がそれに縛り付けられたまま。

——おいで、少しだけ姿を見せて、この人を安心させてあげて。そんな言葉が聞こえた気がした。すぐ隣に座る人は、ずっと口を閉ざしたままだった。それを訝しむ僕の意識は、茂みの向こうから再び聞こえた音によって逸らされた。何かがいた。月明かりでかすかに見えるそれは、ウサギの顔に見えた。僕がそれを認識した時、隣の彼女が少しだけ頷き、そしてウサギに見えた小動物はさっと姿を消してしまった。

「なんだ、ウサギだったのか…」

僕の心に安堵が広がる。そしてそれが飽和した時、直前の自分の言動が思考対象として抽出されてくる。蛇と間違えた事。おかしい妄想。そして逃げ出そうとする自分。全てを口に出したわけではない。それでも、顔が熱くなった。汗が出そうだった。そして、何も見たくない気分が襲われた。特に、今隣にいる人の事は。

「気にする事無いわよ。知らないものは、誰だって怖いと思うものだから」

そう聞こえてきた。今度ははっきりと、隣の人言葉として。振り返る。彼女は立ち上がったところだった。

「行こうか。今日のところは、長居しない方がいいみたい」

そう言って彼女は、手を差し伸べてきた。立てないなら掴まりなさい、そういう意思の表れだと僕は解釈した。僕は少し迷ってから、その手を取って立ち上がった。ほのかな暖かさが感じられた。ほんの、一瞬。それでも鼓動が早まった。

「そのうち、お互い慣れると思うから」

森を見渡すような目線で、彼女はそう言った。何に関してそう言ってるのか、そのときの僕にはわからなかった。

「あーん、またぼーっとしてる、もう！」

古瀬の言葉で、僕は我に返った。確かに止めた記憶のある金属板が、またくるくる回っていた。記憶の残像が、流れるように後方に引いていった。

「実験の授業は、ちゃんと正しいデータとれるまで、二人とも帰れないんだからね。わかってるの？」

古瀬の言葉に僕は、ただひたすら謝るしかなかった。

「すまん。つい、白昼夢に夢中になってしまった」

「それ、洒落のつもり？ でも悪いけど、もう白昼じゃないわよ」

窓から外を見たら、もう星が見えていた。どれがいつも見ている星なのか、見分けはつかなかった。

「ちょっと。また窓見たままぼーっとしたりしないでよ？ 寝るなら家帰ってからね。妄想も同様」

古瀬は怒っていた。

「全くだ。君たちが早く終わらせてくれないと、私も帰れないではないか」

机の上に脚を投げ出した紺田が、偉そうに僕ら二人に語りかけてくる。

「「カエレ」」

二人の声が同調する。それを聞いた紺田は、少しだけ顔を上げてニヤリと笑った。

「あんたは自分の分とづくに終わってるんでしょ。さっさと帰れば？」

「そうはいかないよ、大親友が苦しんでいる姿を後ろに自分だけ逃げるなどと言う卑劣な真似は、僕には出来ないからね」

「ああ、そうですか。じゃあ好きにすれば」

苛立ち気味の古瀬を前にして、僕はおびえて何も言えなかった。紺田は黙って両手を広げ、そして脚を投げ出したまま漫画雑誌を読み出した。

結局その日は、21時過ぎまでかかってしまった。ドームには、誰もいなかった。

2.

彼女に初めて会ったのは、一月程前のことだった。

僕は、夜の大学構内を歩いていた。大学と言っても、そこは殆ど森、否、はっきり完璧に森であった。数年前に、ここにあった原生林を切り開いて博覧会が開かれた。ただし、、自然破壊との批判を免れるために建物と道路以外の部分は木を切らず、虫食いのような形で造成工事が行われた。そして博覧会終了後、その跡地に作られたのがこの みどりがおかそうごうかがくだいがく 緑丘総合科学大学 である。だからこの緑大の構内は、殆どが手つかずの森になっている。

簡素に造られた道を少し外れれば、もうそこは深い森になってしまう。森の中は、人気がない。そして、街路灯もない。標識もない。そんな中を僕は、月光だけを頼りに歩いていた。それで

も森の中は、意外なほど明るく感じられた。

木々が林立し蔓草が這う森。傍目には同じような所ばかりに思える森。それでも注意を払えば、場所によってそれぞれ趣が違ふものだ。古木の虚、枕木のように這った大木の根、根元に生えた茸の大群。そんな中でも、僕の特にお気に入りの場所があった。

東に山毛櫨、西に櫨。そしてその二本の木から展開するように、輪を描いて木立つ櫃。

ちょうど木に囲まれた、天然のドームがそこにある。

ドームの中央に寝そべると、その目線の先に、ぽっかりと枝葉のない部分が表れる。そこから見える、一つの一等星。ただその星と星座の名を知っているだけで、その星座が、どんな神話に基づいているのか、僕は全く知らない。それでも僕は、その星を見るのが好きだった。たまたま見つけてしまった偶然、自分だけが知っていること。それはまるで子供じみた宝物だったけど、見上げた星から届く光は、僕の心に満足感を注ぎ続けていた。

深緑の中に暗く開いたのぞき穴から星を見る。例えばあの星にも生命の存する惑星があったとして、彼らは今、自分たちの太陽が遠い星から覗かれているなどと、考えるだろうか。そして僕もまた、名も知れぬ遠い世界の人から、興味深げに観察されているのだろうか。そんなことを考えていた。

風が、吹いた。そしてその瞬間僕は、人の気配を感じ取った。

...まさか。この時間のこの場所に、僕以外に人がいるなんて。想像もつかないことだった。

確かにここは大学の構内である。建物の中には、夜遅くまで、そして朝まで泊まり込む人もいる。だけど、メインストリートからかけ離れた、普通の人間にとっては何の用もないようなこの場所に、人が来るということが。しかも、こんな夜中に。

しばらく、じっとしていた。狩人の気配を察知し、穴蔵の中で息を潜めるうさぎのように。しかし、そうしていても、誰かがいるのか、こっちに近づいているのかという事はわからなかった。そもそも、特別に聴覚や嗅覚が優れているわけでもない自分に、今現在目に見えない存在を感知するなど出来ない。こっそり後ろから近づかれて目隠しをされてしまう事だってよくあるのだ。

ではさっき感じた人の気配というのは、一体なんだろう。少し強めのそよ風が、誰かがいるという錯覚を起こさせたのだろうか。だとしたら、多少なりとも疲れているというか。そんな分析をしながら、空を見上げる。突き抜けるような闇の中に、光の点々が見える。無限遠。そしてポテンシャルの対象は自分。感覚が増幅される、そんな気がした。

そして再び、風が吹いた。

探してみよう。そう思い、身を起こした。全くあり得ないわけではない。それにここは立入禁止というわけでもない。僕みたいな一風変わった趣味を持つ人間が、他にもいる可能性だってある。もしそうなら、それはきっと自分にとって話の通じる相手。数少ない自分の仲間、だ。

僕は立ち上がり、ドーム上の木立に沿って周回し、脇道に入って辺りを見回した。所々に、ぬかるみ泥濘が残っている。そういえば、昨日は雨が降ったんだっけ。ここを歩き回ったとすれば、足跡が残っているはずだ。草や木の根が覆っているとは言え、靴に泥が付くのを免れることは出来な

いだろう。そう、それは寝転がっても同じ事で、もし今この場所でごろりと寝転がったりすれば、背中には確実に大地の染色が施されてしまうだろう。

でも、あの場所は大丈夫。僕は、振り返ってドームの中を見た。枝が空を覆っているおかげで、地面に雨が掛かることはない。そして何故だか、生えている草も、その密度が違う。まるで芝生のような。だから、あそこの中であるなら、心おきなく寝転がることができる。僕は再び、ドームの中に戻った。中心部は、星と月の光で少し明るい。

風。そして、人の気配。

やっぱり誰かいる。誰だろう。そう思った僕は、そのまま辺りを見渡してみた。0時方向。いない。3時方向。いない。6時方向。いない。9時方向.....。

そこには、一人の女の子が立っていた。

とりあえず、黙っておく。向こうも黙ったままだ。逃げ出すような素振りはない。僕を捕まえようという感じでもない。ただ、多少興味深げにこっちを見ている。

僕は、どんな顔をしておけばいいのかわからなかった。とりあえず、無難に笑っておくことにした。ちょっと引きつったような笑いになっているのが、自分でも判った。

そんな僕に、彼女は微笑みかけてくれた。大丈夫、ちゃんとわかってるから。そう言われたような気がした。

「.....」

背中が痛くなってきた。よく考えたら、僕は今、背中を270°もひねっているのだ。自分でもよくこんなに曲がったものだと思うレベルだ。紺田から酢酸と蜂蜜をたくさん貰っておくようにと言われていたので、何となく実践してしまっていたが、こんなところでその効果が現れたということだろうか。

とりあえず、姿勢を正常に戻す。はずだった。が、勢い余ってバランスを崩した僕は、次の瞬間大地と接吻の儀式を行っていた。

「...う～、くっそ～」

起きあがろうと、まず顔を上げた俺の目に、差し延べられた手が映った。

「...ありがとう」

とりあえず礼を言って、その手を取ろうと思えばしたところで、僕の中でくぎっという音が鳴った。背中に走った痛み、思わず体を支えていた左手をずらしてしまい、再びバランスを崩して、倒れ込んだ。

「ふふっ」

しゅうたい

...醜態だ。かっこ悪すぎる。しかも、初対面の女の子の前で。僕は倒れ込んだまま、顔を地面に向けたまま、動くことが出来なかった。体が動かないのではなく、心が体を動かそうとしなかった。恥ずかしさのカルシウムが、心の中に殻を作り出していた。

その心の中で、そっと温かい手が触れた気がした。驚いて振り返ると、そこには本物の手があった。否、それはさっきからそこにあった。

とりあえず助けを借りて起きあがった僕は、もう一度礼を述べた。

「どうもありがとう。恥ずかしいところを見せてしまいました...」

女の子は無言で、しかし笑ってそれに答えた。心の中に、淡い光が灯ったような感覚があった

。

「ここに、何しに来たの？」

僕は、立ち上がり服をはたきながらそう訊いた。服には泥も埃も付いてはいなかったが、何となく体裁を取り繕うためにそうしていた。それに、初対面の女の子の顔を正面から見つめるような行為は、僕には出来なかった。

「あなたは？」

逆に、問い返す言葉が、答えの代わりに戻ってきた。僕の頭の中でいくつかの回答が並べられた。その中から僕は、この場にもっともふさわしいと思った答えを選んだ。

「星を見るため...かな？」

「星...」

女の子はそう言って、上の方を見上げた。その目線の先では木の葉と枝が天井を覆い、^{かいせつ}回折した光が淡く漏れ込んでくるだけで、空は見えはしなかった。

「ああ。ほら、南の方の、あそこ。ちょうど枝が被ってないだろ。あそこから、星が見えるんだ」

そう言って僕は、彼女の後ろ側にある、枝が伸びていない穴の開いたようになった部分を指さした。

「そう。そっか、これを見てたんだ」

女の子は手を後ろ手に組んで振り返り、そしてそのまま右回りをして向き直った。

「でも、これを見るためだけに、わざわざここに来てるの？」

「だけって事はないけど。まあ、主目的、かな」

「変わった人ね」

「...ま、そうかもな」

誰か他の人間、たとえば古瀬や紺田辺りに言われると、それはカチンと来る言葉であった。否、彼らならまだいい。もっと別の、まだ会って幾日も経っていないような人間にそれを言われる、その不快さと悔しさを、僕は何度も味わっている。でも今、この目の前の少女にそれを言われても、僕は何らの不愉快さも感じなかった。

「で、君はなんでここにいるの？」

「私？」

女の子は振り返って、僕の顔を見た。少し長い黒髪。それに光が反射して、撥ねているようにすら見えた。綺麗だな、と思った。

「そうね...。ちょっとした見回り、かな」

「見回り...!？」

その言葉に、僕はぎょっとした。

「もしかして君、...学園警備隊の人？」

この大学には、学園警備隊という妙なサークルがある。いわゆる自治会や警備のアルバイトというのとは違う。完全に自分たちの意志、もっと正確に言うならば自分たちの趣味として、この大学の治安を守っていかうという連中だ。

もし学園警備隊だったら、隙を見て逃げよう。別に悪い事をしているからというのではなく、単に彼らと関わるのが嫌だった。

「ううん、違うの。そうじゃなくて」

あからさまに不安の表情を見せていた僕に、彼女は念を押すように違うという意思表示をした。

「ここは、私の庭、だから」

「庭!？」

僕はぎょっとした。安心したのは束の間だった。てっきり大学の敷地内と思っていたこの場所だが、もしかしたら誰かの私有地だったのか。自分はいつの間にか不法侵入、そして不法占拠をやらかしていたのか。

この一帯の土地の大半は、元々は県有林だった。そこを一部切り開いて博覧会が開かれ、終了後は大学になって、土地も大学のものになった。が、一部だが私有地だったところもあった。そして、博覧会の開催に反対する人たちが土地や立木を細切れに買い取って抵抗運動をしていたとも聞いている。そういった土地の中には、最終的に買い取られること無く終わり、今でも大学の敷地の中に点在しているものがある。ここも、そういった私有地の一つだったのか。

僕は、頭の中で必死に言い訳を考えていた。だって、私有地だなんて知らなかったんだ、看板も何もなかったじゃないか。他の私有地はみんな、有刺鉄線こそ無いものの、境界線の標識が埋め込まれていたり当時の経緯を説明した看板が立っていたりで、少なくとも大学の敷地でないことは判っていた。でも、ここには

木々が、ざわめいている。ふとそんな気がした。焦点が戻り、ちょっと困ったような顔をした彼女の姿が見えた。思考が、また現実に戻る。

「ごめんなさい、そういう事ではないの」

彼女は、手を前に組んでいた。星を背にして、また僕の方に向き直っていた。

「ずっと昔から、ここで遊んでいたから。ほら、そういう言い方するでしょ、自分の庭みたいなものだ、って」

「ああ、...」

そういうことか、そういうことか。緊張でつながれていた力が、僕の体中から抜けていった。

「言い方が悪かったわね。言葉って難しい」

そう言って彼女はまた、星の見える方角を向いてしまった。草がざわめき、風が同心円上に吹いた。その時、何かの声が聞こえた気がした。

「？」

僕は、声の正体を確かめたくて、反射的に周りをきょろきょろしていた。誰もいなかった。僕と、目の前にいる女の子以外は。

彼女は、手を後ろ手に組み、何かの音楽でも聴いているかのように、黙ったままそっと目を閉じていた。そしてまだ、声は聞こえ続けていた。はっきりとは聞き取れない、否、正確には意味を理解できない、そう、それはまるで、どこか遠い外国の歌のようにも聞こえた。

優しい、歌。僕はそっと耳を傾けた。言葉としての意味はわからなくても、なにか伝わってくるものがあるように思えた。親しみ。歓迎。好意的な感情が僕の心を満たした。初めてなのにはじめてではない、そんな事を思ったとき、再び女の子は、僕の方に振り返った。

「だってあなたは、ずっと前からここにいたんだもの」

それはどういう意味、僕が問いかける前に、彼女は次の言葉を継いでいた。

「これからも、ずっとここにいるのかしら？」

それは、何かの期待を込めた言葉のようにも聞こえた。歌はもう聞こえない、だからそれは、僕の勝手な思いこみだったのかもしれない。それでも僕は、その期待に応えるつもりで言った。

「また来る。きっと、ここにいる」

「そう」

彼女はそう言って、目を細めて笑いながら辺りをぐるりと見渡した。

「よかったわね」

それは誰に言っているのか、まだ判らなかつた。判らなかつたけれど、その時は、それを不自然だとも思わなかつた。むしろ、そうする事の方が自然とすら思えた。

「今更だけど、私は野口^{まりね}毬音。文理の2年。あ、もちろん緑大のね」

その言葉で、僕は現実に引き戻されたかのような感覚を持った。今までまるで夢見心地のような感覚で話していたけれど、なんだ、この子は僕と同じ世界に住んでる人だったんじゃないか。

「僕は、井塚響助。文理の、自然学科の2年」

「そう。こんなところも、似たもの同士だったのね」

彼女は笑っていた。僕も笑い返した。森は静かに時が流れていた。

3.

寮の食堂で僕は、早めの夕食をとろうとしていた。早めの時間にしたのは、この後出かけるつもりがある、それもあるが、それ以上に時間を誤ると食堂が異様に混んでしまうという事もあった。

食堂に入ると、左手にカウンターがあり、厨房から突き出されるように皿が並べられている。その中から、カルビチャーハンを選び取ってトレイに乗せた。3列あるレジは、左の一つにだけ2人並んでいる。残り二つ、天井から「まるぱす／おんりい」という看板が吊されているレジに

は待ちはない。緑大は運転免許証等の身分証明書を使った統合身分決済プロジェクト「まるばす」に参加しているので、学生証一枚あれば食堂や購買の支払いも出来るし、精算も早い。それでも尚現金に固執する人間はいるもので、おかげで現金が使える唯一のレジは、昼時には酷い混雑になる。

敢えて並んでまで現金で払う必要など無い、僕はそういう考えの人間なので、残りの内の中央のレジに行き、トレイをレジカウンターの上に置いた。レジの人が、丈の低い位置にある覆いの下までトレイを進める。280円という金額が表示されると、僕は学生証を取り出して、覆いの下にあるスキャナにかざした。ピッ、という音。

「はい、ありがとうございました」

レジの人の声に呼応して、僕はトレイを持ち上げた。目の前に並ぶ、大量の椅子と机。空きは多いとも、少ないとも言える状態。4人がけのテーブルに一人で座り黙々と食っている、そんな奴が多いからだ。かく言う自分も、数分後にはそうなっているだろう。利用効率が悪い、エントロピーの非常に高い状態です。そんなことをこの間の授業でやったな、そう思いながら、誰も利用していない席を探した。がたりという音がして、男が一人席を立つ。離れたのを見届けてから、彼が座っていたのとはす向かいの位置に腰掛けた。

「やれやれ...」

大した仕事をしたわけでもないのに、そんな言葉が出てしまう。もっと遅い時間、もう少し混んでいる状態ならば、却って何の遠慮もなく誰かが食っている隣とか向かいに座れるのかもしれない。しかしごくたまに、座れなくなる程混んでいるときがあって、そういうときはトレイを持ったまま食堂の仲を流浪の民としてさまよわなければならなくなる。それはかなりいやだ。

この食堂は、学寮の住人以外からは殆ど利用される事はない。そして、4人がけの席が150、計600人が収容できる広さがある。決して狭いわけではない。にもかかわらず、時として満席になるくらい混んでしまうのは、人という生き物が「決まった時間に飯を食う」という習性を刷り込まれてしまっているからだろう。

「悲しい習性だよな...」

天井を仰ぎながら、ついそんな事を呟いていた。実際のところ本気でそう思っているという自覚はないのだが、口に出てしまうという事は案外本気なのかもしれない。という事は僕は、人が悲しい生き物だという心理に支配されてしまっているのだろうか。だが、たかが飯ごときで人という生き物を否定するような考えは如何なものか。否、たかが飯と言うが、生命活動の基本は飯を食う事であるのだから、この行動の正当性を考える事は生命種そのものの価値を論じるに等しいものであり

「ねえ。それ、そんなに辛い？」

声をかけられて、はっと我に返った。目の前にある食べかけのカルピチャーハンにはスプーンが突き刺さったままになっていた。そして横、声のした方を向くと、そこには古瀬智羽が立っていた。

「ずーっと、上向いちゃって。そんなに辛そうに見えないけど、実は大穴？」

大穴の意味するところの詳細はよくわからなかった。が、要するに、あまりの辛さに食べかけでずっと天井の方を向いたりしていたと思われた、という事だろう。

「いや、決して辛いわけではない。ただ、ちょっと考え事をしていただけだから」

「そう。何の考え事？」

古瀬は、僕の隣にある椅子に手をかけながら訊いてきた。隙あらば隣に座って来かねないかのような素振りである。油断ならない。僕はその椅子の背もたれに、ごく自然に見えるように左手を添えた。こうすれば、簡単に椅子がひかれてしまう事もないだろう。

古瀬はその左手の存在に気づいたようだった。ちらりと目をやってから、ふふんと笑顔を見せた。僕も笑顔で返した。

数秒間の、笑顔と無言の応酬。無意味な緊張感が高まっていくのが、自分でわかる。それでも左手は動くことはない。そして古瀬は視線を僕の顔に戻し、少し屈むようにして、言った。

「響助君、えっちな事考えてたんだ」

「な...！」

何でそうなる。そう叫びたかった。が、少ないとはいえ人の結構いるこの場所で、あまり大声は出せなかった。僕はぐっと気持ちを抑えて、出来るだけ平静を装って答えた。

「いくらなんでも、食事中にそういう類の事を考えるほど、僕は忙しい人間ではないぞ」

やはり平常心というわけにはいかず、あまり理にかなった返答は出来なかった。

「食事中でなかったら、しょっちゅうそういう事を考えてるわけだな」

古瀬は既に隣の椅子に座り込んでいた。僕の左手は、一矢報いる事すらかなわず、無抵抗に後ろに押しのけられていた。古瀬はどこかに向かって手を振っている。誰かを呼ぶつもりらしい。どういうつもりだ。この女、凶々しく隣に座ってきたあげく、さらに仲間を呼ぶつもりか。

「もしや、僕の事を取り囲んで集団でいぢめるつもりか」

「は？」

手を挙げたままの古瀬が口を開けたままで振り返る。どうやらはずれだったようだ。古瀬は挙げていた手を下ろし、こちら側に身を乗り出してきた。

「なに、いぢめてほしいの？」

「そんなわけあるか」

「じゃあ、何。何で突然さっきみたいな言葉が飛び出してくるかな？」

「常に古瀬が僕に何かするんじゃないかと不安なんだ」

「あたし、なんにもしてないでしょ」

「してるだろ。さっきだって、その、えっちなこと考えてるとか...」

最後の方は、口ごもってしまって殆ど言葉にならなかった。はっきり言えなかったことと、その言葉の意味自体が相まって、僕の中に恥ずかしさがこみ上げてきた。無意識のうちに、古瀬から目を逸らしてしまう。

「それでも言わなきゃ、座らせてくれそうになかったからなんだけど」

「そう、でもないけど…」

「そう？」

「そうだよ。隣に座るくらいで、そんな」

「隣はいいんだ。じゃあ」

古瀬は、ほんの少しだけ考える仕草をして、言った。

「膝の上とかは？」

「…だからさ。何でわざわざ、そういう人を惑わすような事を言うわけ？」

「そういうわけじゃないよ。ほら、あとから3人来たら一人は椅子に座れないじゃない。だからね」

「で、そういう事してこっちが躊躇^{ちゆうちよ}している間に、別の一人が貴重な食料をかすめ取ろうという魂胆か」

「あ、それいいね」

古瀬は本気っぽく驚いて見せた。僕は少々鬱^{うつ}になった。目の前には食べかけのカルビチャーハンがあった。僕は少しでも抵抗の意志を示すために、古瀬に背中を向けてチャーハンをがつつと食べ始めた。下手に話をしていると、どんどん翻弄^{ほんろう}されてしまう。それに、時間が経てば冷めてしまう。さらに最も重要なことに、古瀬が本気でこれを奪おうと考えていることもあり得る。だが、食べきってしまったら、奪われる事はない。普通は。

古瀬の目の前に誰かが座るのが、気配で感じ取られた。誰か知っている人物のような気がしたか、気のせいだと思いこむ事にした。意地を張って、気づかないふりをしていた。チャーハン残り4口、急げば40秒ほどか。食べ終わったら速攻で逃げよう。そう思って、一山をスプーンでかき込もうとした。二人が何か会話しているように聞こえたが、意図的にそれを聞き流していた。そのうち声がしなくなる。会話がとぎれたのか、そう思いつつも、なおも無関心を装い続けていた。

「響助君ったらえっちな事ばかり考えてるのよ、毬音」

「ぶっ！？ えほっ、げほげほっ」

思わず僕は口の中のものを吹き出してしまった。呼吸の急激な変化に、気管支が痙攣^{けいれん}を起こしている。

「ぜーっ、ぜーっ、ぜーっ、ふーっ」

ひとしきり深呼吸を終え、呼吸が落ち着いたところで、ゆっくりと頭を回して古瀬の向かいに座っている人物を見る。見慣れた、落ち着いた笑顔が見えた。それは紛れもなく、野口毬音その人だった。

「もう大丈夫？」

野口毬音は落ち着き払った声で、そう訊いてきた。それはきっと本心、そう思えた。その声を聞いただけで、僕の中に平常心が戻ってきた。

「ああ、僕はもう大丈夫」

手近にあったコップをとって、中の水を一気に飲み干す。多少胃に悪そうだが、さしあたり気

分を落ち着ける事の方が先決と判断した。実際、それで冷静な思考が出来るまでに回復できた。訊くべき疑問も絞られる。

「ところで、何故あなたがここに？」

「智羽に呼ばれたから」

「そうなんだ」

そうかそうかと口には出さず納得する。とりあえず。とりあえずは。

「古瀬とは、知り合い？」

「うん。同じ学科だし」

「え？」

僕は一瞬戸惑った。野口毬音が、僕と同じ学科？ 疑問が脳を駆けめぐって記憶の底にまで突き抜け、そして僕は一つの事実を思い出していた。ああ、そういえば、古瀬は自分らと学科違ったんだっけな、と。

同じ文理学部ではあるが、僕は総合自然科学科、古瀬は認知情報科学科に所属していた。が、同じ授業で頻繁に古瀬と顔を合わせるために、まるで同じ学科の同級生であるかのような錯覚をしていた。それは古瀬が無闇に自分の所属する学科以外の授業を取りたがり、中でも他学科学士の受講を積極的に受け入れている総合自然科学科の授業によく出没する、その為だった。1年生の頃からずっとこうだったため、今では何の抵抗も違和感もなく総合自然の一員として認識され、イベントや特別授業などがあって名簿が作成されると、必ず正規の学科メンバーに加えて、彼女の名前も載せられていた。

だから僕は、たった今まで古瀬が自分と同じ学科なんだと勘違いしていた。

「あたし、ほんとは認知情報だよ？」

「いや、わかってる、わかってる。当然わかってるからな？」

少しでも古瀬に隙を見せるのが嫌で、僕は必死に、今思い出したばかりの情報をあたかも忘れようのない常識が如く振る舞った。

「うそだ。響助君、あたしのこと誤解してた。ありのままのあたしから目を背けてた」

古瀬は意図的なのか何なのか、なかなか信用しようとはしなかった。視線の片隅に、この様子を微笑ましげに眺めている毬音の姿があった。僕は救いを求めるように、彼女に視線を流した。

「そうね...とりあえず、結論として。私と智羽は認知情報で、井塚君は総合自然。これは常識。だから今後忘れないこと。忘れたら最後の一人を簀巻き。ということで、手を打たない？」

手打ちとかそういう問題とは違う気もしたが、あまり細かいことにこだわるつもりはなかった。と言うか簀巻きとか最後の一人ってなんだ。

「僕はそれでOKです」

「...」

古瀬は、何も答えなかった。

「智羽？」

野口毬音は促すように、古瀬に問いかけた。

「う、ううん、あたしもそれでOK、なんだけど...」

古瀬は、僕と野口毬音の顔を交互に見て、言った。

「あなた達、お知り合い？」

「はい、お知り合いですよ」

「ああ、そうですか...」

何のためらいもない、さも当然であるかのような回答。そのまま微笑んでいる野口毬音に対し、古瀬は次に出すべき言葉を迷っているようだった。その声は聞こえない。何を言えばいいのかわからないのか、言いたいことがあるけど言うべきかどうか悩んでいるのか。それは僕にはわからなかった。

そして何かが、意識の中に流れ込んできた。それが何であるか、すぐには認識できなかった。頭の中で反芻するうちに、それは自分の中で言葉へと変換されていった。

『二人は、どういう関係？』

え、と僕は小さく声をあげて、古瀬の方を見た。それが古瀬の言葉であるかのように思えたからだ。ただ耳から聞こえたという感じではなく。別のところから来た意志が、自分の中で言葉に変換されたような。少し妙な印象があった。そして実際、古瀬が僕か野口毬音に何かを問いかけた様子はない。まだ何かを迷っているような表情だった。

じゃあ何なんだろう。表層意識にはないけれど、自分では古瀬の一挙一動が気がかりで、思い詰めて、勝手に自分で結論出して、そしてそれを古瀬の言葉としてすり替えてしまったんだろうか。

だとしたら少しおかしい。疲れてるかもしれない。思い当たる節はいくらでもあるし。毬音には悪いが、この話が終わったらさっさと退散して二時間くらい寝ることにしよう。そこまで予定を決めたところで、古瀬が口を開いた。

「うーん、お二人はどういう関係かな？」

再び僕は、え、と声をあげて、古瀬の方を見た。さっき感じた、自分の思いこみの言葉と同じだ。今度は間違いなく、本物の言葉として。ということは、何だろう。もしかして、さっきのは思いこみではなかったということだろうか。全ての動物に備わっていると言われつつも未だ解明されていない危機探知能力、第六感というやつだろうか。

そうすると今の古瀬の言葉は、僕にとって非常に危険なものだということになる。いや実際、回答如何では、僕の立場は非常に危ういものになるかもしれない。古瀬が実は野口毬音に惚れ込んでいて、「毬音姉様はあなたみたいなヘタレなんかに渡さないわ！」とか言い出してこの食堂が凄まじいまでの修羅場に変貌してしまうかもしれないのだ。そしてこの食堂には僕の弁護をしてくれそうな人間はおそらくいない。否、いないならともかく、紺田あたりがどこからともなく登場して、訳のわからん弁護を始め出すかもしれない。そうなったらもう目も当てられない。

野口毬音には悪いが、話が終わる前に逃げよう。そう予定を変更し、僕は席を立った。

「あっ、ちょっとどこ行くの！」

「ごめん、ちょっと二時間くらい寝てくる」

抗議の声を上げる古瀬は無視し、野口毬音にのみ、すまなそうな顔をして弁解の言葉を述べた

。

「あたしの質問、回答まだなんだけど。もしかしてそれから逃げる気!？」

そうです。

「そうなの? そうなのね! 毬音、あんなヘタレやめときなよ!」

やっぱりこいつ、僕